

# これからの幼児教育に望みたいこと



小 松 福 三

この稿をまとめる数日まえ、サンケイ新聞の記者から「幼稚園を選択する規準を十項、段階的にあげてほしい」というインタビューを受けた。なんでも、幼稚園の願書受け付け、テストのシーズンがせまってきたので、読者の参考になる記事をもとめたというということであった。よくよく聞いてみると、現場の園長、児童心理学者、幼児教育関係学者、文化人、評論家など十五人を選んで、『期待される幼稚園像』をレリーフしてみたいというのである。

翌々日の十月二十六日の朝刊にそのまとめが発表されていた。山下俊郎、古川原、庄司雅子、波多野勤子、羽仁進、松居直、玉越三朗、阿部進、尾村偉久、中川李枝子、五代利矢子のほかは現場の教師。この十五名がそれぞれにあげた順位をつけた十項目は、人によって重複もあるので全体では五十項目となっていた。

記者はこれを、誰がどんな項を何番目にあげたかということが明確にわかるような一覧表をつくり、各項ごとの得点を算出し、それぞれについて若干の解説も付していた。

この得点表を高い方からひろってみると、次のとおりである。

- ① 先生が子ども好きで、自信があり、研究熱心であること (六四・五%)
- ② 広い室内と庭を持つこと (六四・〇)
- ③ 距離が近く歩いて通えること (六二・五)
- ④ クラス定員ができるだけ少ないこと (四八・〇)
- ⑤ 園長と先生が対等で、職場が明るいふんいきであること (三九・〇)
- ⑥ 園児の総数が多すぎないこと (三六・五)
- ⑦ 安全と衛生が配慮されていること (三二・五)

⑧教育方針が園として確立していること(三三・〇)

⑨しつけよりも元気にあばれまわらせること(三二・〇)

⑩親と教師と話し合う機会が多いこと(三一・五)

ベストテンを選べば以上の通りであるが、私が選んだ十項は、その中に四つしかはいつていない。どうも私の項目のあげ方は一般性がないのかもしれない。参考までに、ベストテンに含まれなかった私の選んだ項目を記しておく、次の通りである。

①売名的な行事をしない。

②生産の喜びを体験させる。

③くふうされた遊具が解放されている。

④安全衛生も大切だが、健康・体力づくりに重点をおいている。

⑤先生の給料が高く組合もある。

⑥親に気がねをせず、おべっかをつかわない教師集団である。

先にあげたベストテンの中、私は③④⑤⑥をあげているわけであるが、①②⑦⑧はわざわざとりあげるまでもない。いわば幼稚園を経営する以上当然考えられていることであると思つて、とりたてて指摘しなかつたまでである。しかし、このように他の多くの人々が指摘されたところを見ると、たとえば、子ども好きでない先生がいたり、教育熱心でない教師がいたり、教育方針のない園があるわけになる。まことに残念なことである。

そういえば、一昨年(一九七〇年)の十月ごろであつたらうか「週刊読売」で

「いいかげんな幼稚園教育」というのを特集したことがあつた。

この特集記事によると、一クラス四、五十名の園児をひとりの教師で担任したり、便所にいくのに隣の教室を通つていかなければならない教室配置であつたり、存分に遊べる園庭がないので、部屋で歌をうたうか、おり紙や絵を描いてばかりいるいいかげんな幼稚園が多いことを指摘していた。さらに、経営者の前歴はとみると、都市近郊の場合はそれまで農業をやつていた地主というケースが意外と多いことを指摘していた。こんな園には教育方針などがあるはずはなく、もうけ主義の経営方針しかないはずである。最近はまだ、おふる屋の次男坊が家庭風呂が多くなつた新興住宅地では新しく「おふる屋」を作つても経営できないので幼稚園をはじめたりしているケースも多いと聞く。まったくこまつたものである。もともとお寺の坊主が幼稚園を経営していることから賛成できない私にしてみれば、腹立たしいきどおりすら感ぜずにはおられない。

サンケイ新聞でまとめた「期待される幼稚園像」は、そのまま「これからの幼稚園教育に望みたいこと」におきかえられもするが、教育内容の点ではやはり不十分である。そこで、以下にこの点について雑感的私見を記してみた。

まず第一に考えたいことは管理主義的・躰主義の教育を排除して

いくことである。そのためには、クラス定員を少人数にしなければならぬ。ところが文部省は、日私幼などの圧力に屈してか、四、五歳児のクラス定員を「四十名以下」としている。一クラス四十名もいれば、どんなベテラン教師でも、管理主義にならざるをえない。

オルガンでもって、子どもをあやつる教育(?)という形をとるか画一的製作をさせるか、それらから一步も脱却できないのである。多少わきみちにされるかもしれないが、このこととかかわって、幼稚園でうたう歌がどうもおかしいものが多い。たとえば「出してひっこめて、トントントン」といったもの。おかたづけ、おかたづけ」といった歌など、静かにさせるための歌や、何かの仕事をさせるための歌があまりにも多すぎる。したがって、これらの歌を幼稚園から追放することも真剣に考えてみる必要も出てくるのである。

第二は、行事中心のカリキュラムを追放し改造することを望みたい。天皇誕生日がやってくると、「天皇」ということを正しく認識できない幼児に天皇の誕生日を祝わせようとするこじつけのカリキュラム(日の丸の製作)を考えたり、子どもの日といえはおきまりのように、「こいのぼり」の製作をさせ、母の日といえ「プレゼントづくり」とやるのがきまっている。私はこのことを完全には否定しないが、行事の点綴で一年間のカリキュラムを

考えていくパターンを批判したのである。もっともって、子どもの能動的なあそびを、いわゆる組織された活動にしていくなカリキュラムを構想していかなければならないと思うのである。

第三にはカリキュラムが行事を追ってつくられているので、内容的にまさに無系統であるということ改善しなければならぬ。何をどう経験させればよいか、その順次性はどうでなければならないか——といったダブトが、現場教師にはない。伝統的な教材にしがみつき、その日その日ですごしているのが現状のようである。たとえば「母の日」に例をとってみると、三歳児でも四、五歳児でも主要な活動はプレゼント製作である。そして、「おかあさんは大変忙しい仕事をしていらっしやるのでわがままをいわないようにいつも、ありがとう」と感謝しなければなりません」と、お説教で終わる。年齢的配慮があるとすれば、プレゼントとして製作するものの難易が配慮されているだけである。私はそれだけでは不十分といいたいのである。

すなわち、各年齢段階で、母親の労働についての程度理解させ、認識させうるのかを検討し、それを基軸にしてカリキュラムを考えていくべきだと思うのである。つまり具体的には、三歳児段階では母親の多様な仕事・労働の姿を数多くあげさせその結果「母親は忙しくて大変だ」という実感を持たせる。四歳児では母親の一日を時間経緯で追い、母親の仕事・労働を抽出し、仕事の

質、内容によって大まかな分類をこころみせさたり、自分との関係でその仕事をとらえさせるといったことも考えられる。四歳児では、家事労働としての母親の仕事と、同じ母親の中でも、職業労働としての仕事を持っている人もあるのだから、いわば家事労働と職業労働の区別などでもできるようにしていくことも考えなければならぬと思うのである。

以上はほんの一例であるが、このほか、たとえば「数」の体験についての系統、「製作」についての材料、用具、技術の系統、からだづくりとかかわって、ボールあそびやゲームなどの系統、読み聞かせる童話の選択など、もっとも系統性と順次性を考えていかなければならないのではないだろうか。

第四は、教育内容がすこぶる消極的であるということ、この点をもっと積極的なものにしていく必要はないか——ということである。

たとえばからだづくりについて考えてみよう。教育要領をみると「健康」という領域がある。そこには、手を洗うとか、衛生的習慣を身につけさせることが主眼になっている、いわば消極的健康管理が主軸である。決して悪いことではないが、もっともつと、たくましい頑健なからだをつくるために運動（スポーツ的ゲーム）を軸にした内容を考えたいものである。その意味では、「健康」という領域ではなく、より積極的に「体育」とすべきで

あるとすら考える。さらに、衛生的習慣を神経質に考えるより、「よごれた手でにぎりめしを食ってもおなかをこわさない子どもをつくる」ことぐらいをめざしたいものである。

第五は、生産と労働の教育を真に考えて内容を組み立ていくことを望みたい。たとえば極端にいうなら、花を植える花だんがあれば菜園にするぐらいのことを考えたいのである。ところが現実には、花を育てることは情操教育になる、園の美化に役立つ、といったことをあまりにも重視して、そのスペースが子どもたちからとりあげられているようである。土にまみれてうねを作って小松菜の種をまき、飼育している小鳥やうさぎの糞を菜園のこやしとしたり、収穫できる段階では小松菜のみそ汁をつくってみんなで食べる——といったことなど、飼育や栽培など、もっともつと考えていくべきではないかと思う。

このほか、まだいいたいことはあるがすでに紙数がつきてしまった。要は、これまでの伝統的なカリキュラムにダブトをして、何をどう、どんな順序で経験させていけばよいかという観点でカリキュラムの改造を考えていくべきである、ということである。そのためには、「幼年教育の構造」を明確にすることが前提となるはずである。